2016年9月11日

福音書からのメッセージ

> 言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。
>
> （ルカによる福音書15章7節）

今日のたとえは、イエス様の元に徴税人や罪人たちがやってきて、イエス様の話を聞こうとしていた中で語られました。その場にはファリサイ派の人々や律法学者たちもいたのですが、彼らはイエス様が徴税人や罪人と関わるのが気に入らなかったようです。彼らファリサイ派や律法学者は、神さまから与えられた律法を守ることで救われると信じていました。だから律法には何と書いてあるのか、いつも研究していました。そのような彼らにとって、イエス様のおこないは許しがたいものでした。なぜならイエス様は安息日にしてはならないことをするし、彼らから見るとイエス様の発言は、神さまを冒涜するものと映ります。そして今、目の前で徴税人や罪人を受け入れているのです。だから彼らは不平を言うのですね。

わたしたちはこの場面を読むと、ファリサイ派や律法学者って何と心の狭い人たちなのだろうかと思います。しかし当時の社会では、ファリサイ派や律法学者がそう思うのは当然でした。もっと言うなら、ユダヤ人の多くも彼らと同じ考えでした。

徴税人とは付き合えないし、罪人と関わったら自分たちまで汚れてしまう。そうやって人々は彼らを嫌い、無視していました。そのファリサイ派や律法学者たちに、イエス様はたとえを語られたのです。

100匹の羊のうちの1匹が見失われました。この羊は好奇心旺盛でも自分勝手でもありませんでした自分から迷い出たのではなく、見失われたのです。

野生動物が群れで行動しているとき、そのうちの一匹が足をくじいてしまい、歩くのが困難になったとします。すると周りの仲間たちはどうするでしょうか。ほとんどの場合、足をくじいた動物はその場に置いて行かれます。足手まといになるからです。その1匹のせいで敵に襲われたらたまりません。夕方までにオアシスにたどり着けないかもしれない。群れから離れていくその1匹は、足を痛めたり、年老いてしっかり歩くことができなくなっていたり、目や鼻が利かなくなっていたり、弱いがために他の仲間にいじめられていたり。普通の羊飼いであれば、そんな1匹のことなど、気にしません。だってそうでしょう。目の前には、元気な羊たちが99匹もいるのです。

でもこのたとえに出てくる羊飼いは違います。羊という動物は大変弱い動物です。1匹だけにしておくと、夜も越せないことをよく知っていました。だから見つけ出すまで、探し回るのです。この見失った羊が、大切なのです。そしてこの羊飼いが小さな羊に対して注ぐ愛こそ、神さまの愛なのです。

わたしたちも神さまから一方的に見いだされることによって、その関係が回復されます。わたしたちは神さまの声を聞き、その手につかまれ、歩いていけるのです。神さまは、あなたを愛しておられます。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/